

女装  
お嬢様  
と  
お屋敷  
で

二角レンチ

体験版

R-18



私が男か女か賭けをしない？

# 目次

プロローグ .....	3
お嬢様にみそめられる .....	4
フェラで射精させられる .....	12
彼女のお尻で童貞を捨てる.....	22
原作利用権について .....	29
プリンタでの印刷方法 .....	31
奥付 .....	32

# プロローグ

洋館の一室で、長く美しい髪のお嬢様が僕を見下ろしていた。

僕は床に座り込み、手をついて、まるで神々しい聖女にひざまづくようにして彼女を見上げていた。

彼女は自分を男だと言うが、ここまで美しい人が男であるわけではない。

彼女が女なら僕の勝ち。彼女が男なら彼女の勝ち。

彼女は女に決まっている。僕は賭けに勝ったときのご褒美に胸を躍らせる。期待で股間はもうズボンを張り裂いて飛び出しそうなほど突き上がっていた。

彼女がそれを見てほほを染める。僕のモノを欲しがっている。

僕はなんて幸運なのだろう。これほど美しく、そして魅惑的な女性に会ったことがない。

その人が、こんな答えのわかりきった賭けを申し出て、勝てばご褒美をくれると言う。

勝てば彼女を好きにできる。負ければ彼女に好きにされる。

彼女は絶対女だ。いくら間近で顔を見ても、匂いを嗅いでも、手を握っても、女だった。

手はやわらかかった。肌はかぐわしかった。そして顔は美しく、非の打ち所が無かった。

彼女はもうパンツを脱いでいる。目の前で、スカートに手を入れて脱いで見せた。

あとはスカートをめくりあげるだけ。その股間を見せて、男か女か確かめるだけ。

興奮のあまり心臓が破裂しそうだ。今まで女の子と縁が無かった僕が、こんな誰よりも美しい女の子を好きにできる。

童貞でよかった。清楚で上品な彼女が、実は年下の童貞を好きな淫乱だったなんて。

彼女がゆっくりとスカートを持ち上げる。舞台の幕が上がるように、すばらしいものを見られる期待がいやがおうにも高まる。

待ちきれなくて時間がとても長く感じられる。一秒が一時間にも思えてしまう。一瞬たりとも待ちきれないのに、それが永遠に続く

ように思えた。

ごくりとつばを飲み込む。彼女がまた、どんな冷たく凍てついた男でも瞬時に蕩ろけさせる魅惑のほほえみを浮かべる。

僕は知らなかったのだ。そのほほえみが、女には絶対に出せない色気だということ。

スカートが上がる。女の人をあそこをはじめて目の当たりにする。僕はひざまずいたままぐぐぐと身を乗り出した。

長く清楚なスカートがはだけられる。下着をつけていない露わなそこが目に入る。

うっすらとした、ていねいに整えられた芝生の下にあったものは。

僕は、それから目が離せなかった。まばたきすることも、息をすることも、身動きすることも、思考することさえ出来なかった。

このときから、僕の人生は変わった。彼女に変えられた。

それは幸せだろうか。知らない喜びを知ることになる。知らない世界を知ることになる。二度と戻れない、知るはずもなかった絶望と幸福を知ることになった。

彼女が、ああ、彼女。女よりも美しく、女よりも女らしく、女よりもやわらかく、女よりも気持ちいい。彼女が彼女でなくてなんと言えればいいのか。

女よりも美しく、女よりも女らしく。僕は彼女がどうやってそうなったかを、彼女自身の手で、舌で、そしてどんな男よりも男らしいそれで骨の髄まで心の底まで穴の奥まで教え込まれることになった。

## お嬢様にみそめられる

僕は毎週日曜日、この大きな公園に来ていた。

日曜日にはなるべく予定を入れない。入れるにしてもなるべく午後からにする。毎週日曜の正午前、僕はこの公園にいたかった。

僕の好きな人が、毎週日曜日にここへ来ているからだ。

この公園には出店がいくつかある。彼女はそこのホットドッグを食べに来ていた。だから僕はそれより少し早めに来て、そのホットドッグを買って食べることにしていた。

今日もホットドッグを食べながら彼女が来るのを待っていた。彼女が来る場合は必ず正午前に来る。たまにこない日もあるが晴れた日はだいたい来ているようだった。

ホットドッグを食べ終わる。ゆっくり食べたいところだがとてもおいしいので冷める前に食べきってしまう。彼女が毎週食べに来るのもうなずける。

きっと、普段は豪勢な食事ばかりだからこういう庶民の味を食べたがるのだろう。

来た。僕は日に当たりながらくつろいでいる振りをして、芝生の上で座りながら遠目にちらちら彼女を見た。

彼女がお付きのとてもたくましい男とともにやって来た。

今日もきれいだった。遠目でもその美しさが際だっていた。

長いスカートに長い髪。美しい顔に清楚なふるまい。上品な服に優雅な物腰。彼女はだれが見ても金持ちのお嬢様だった。

彼女は人の少ないこの町のちょっとした有名人だった。

だれも詳しいことは知らない。すぐ向こうに見える山の上の洋館に住んでいる。

古く寂れた洋館を彼女の親が買い取り、彼女は数人の身の回りの世話をする使用人と共に暮らしている。

病気のため自然に囲まれた山の中でしばらく療養しているのだと言われている。彼女の両親は一緒に住んでいない。

こうして出歩いているところを見ても病気だとは思えない。彼女には両親を困らせるような何らかの問題があり、そのためここに隔離されたというのがもっぱらのうわさだった。

両親に疎まれ見捨てられるような何か。それが何かわからないが、みんな彼女に近づくのを怖がった。

人が少なく仕事も無いこの町から、若い人はみんなよそへ出ていく。貧しい老人たちは金持ちや得体の知れない者を嫌うし子供たちにもそう教える。彼女に近づいたり口をきいたりしてはいけないと、僕も友達も親に言われていた。

僕はそういうのが嫌いだった。面と向かっては逆らえないけれど、よく知りもしない人の悪口をみんなで言い合うのがとてもいやだった。

みんな心が醜い。両親も先生も少しも尊敬できない。きれいごと

を言うわけではない。そうしないと社会で生きていけないのはわかる。でも僕はそれに混じって醜く笑いながら人の悪口を言って楽しむのがとても嫌いだった。

今はまだ学校に通っているからいい。ほとんど授業で、友達とは遊ぶときだけ調子を合わせていればいい。でも社会に出て働きはじめたら仕事している間ずっと、そういう汚い部分に合わせないといけなくなる。そう考えるととても辛かった。

だからこそ彼女に惹かれる。みんな勝手なうわさで彼女を悪く言って楽しんでいる。でも彼女は何も悪くない。何もしていない。おかしい様子も無い。

彼女はきれいだ。みんなと同じように心は醜いかもしれない。でもきれいかもしれない。その外見と同じくきれいなものかもしれない。

僕は彼女を見るのが好きだった。お付きの使用人がいて、車で移動している彼女を見られるのはこの日曜の昼だけだった。

彼女はとても美しかった。長い髪、長いスカート。すらりとして手足が細い。物腰は優雅で、ゆったりとしているのにさらさら流れる清流のようになめらかだった。

これほど美しい顔をした女性を見たことがない。このときはまだ知らなかった。それは女ではありえないほどの美しさだということを。女ではありえない色気からくるものだというところを。

彼女はいつもほほえんでいた。にっこり笑っているわけではない。笑っているとは見えないほどのかすかなほほえみ。そのほんのわずか唇からこぼれる笑みが、とても上品な温かさをたたえていた。

近づく度胸は無い。いつも少し離れた芝生に座って彼女をながめるだけだった。

もう少し度胸があれば、彼女がホットドッグを買うとき一緒に並びたかった。彼女のそばにいて、彼女を間近で見たかった。

きっといい匂いがするだろうな。僕は彼女に悪いと思いながらも彼女のことを考えオナニーしていた。

あの美しい、きっと男を知らない処女で貞淑な彼女が、ベッドの上で、僕のうでの中でみだらに悶えよがる。セックスしたことも無い童貞のくせに、彼女を何度もイカせる想像をしながら中出しするつもりでティッシュの中に射精した。

彼女はホットドッグを自分で買う。お付きの人は少しだけ離れてじっと見守っている。使用人になにもかもまかせたりせず、自分で庶民の食べ物を買ひ、食べる。

高嶺の花という言葉がとても似合う彼女に対し分不相応に愛情を感じられるのは、そういうただのお嬢様とは違う身近さがわずかにあるからだ。

お嬢様。彼女の名前はなぜか誰も知らなかった。みんな金持ちのお嬢様という。それは金持ちに対する嫉妬と侮蔑がこめられていた。でも僕は、尊敬とあこがれの意味でお嬢様と呼んでいた。

ホットドッグを手に持った彼女がこちらを見る。僕はあわてて目を逸らす。

毎週彼女はここへ来る。僕はそのときいつもここで彼女を見ている。

彼女はいつも僕を見る。僕はいつも目を逸らす。

本当は彼女の顔を正面から見たい。彼女と見つめ合いたい。でもそれはできない。

いつも見ている僕が見逃してもらえるのは、ここで目を逸らすからだ。それで彼女はホットドッグを持ってお付きの人と立ち去る。

もし失礼にも見つめ続けたら、きっとあのがたいのいいお付きの人と呼ばれ、僕は痛い目に遭わされる。

誰も事実を知らない根も葉もないわさでは、彼女の機嫌を損ねた奴は屋敷に連れていかれ恐ろしい目に遭わされるという。彼女はそんなことをしないだろうが彼女の両親は別だ。娘に色目を使うような奴を懲らしめるよう使用人に指示しているかもしれない。

僕は目を逸らしたままじっとしていた。こうしていれば彼女は立ち去る。僕はその後ろ姿を眺め、スカートに覆われた見事なラインのお尻をじっくり目に焼き付けて、夜のオカズにしていた。

はじめのころは緊張したがもう慣れた。彼女が僕を見て、僕が目を逸らしているわずかな時間、僕は彼女の大きなお尻を抱えて後ろから激しく犯しまくる想像をするくらい余裕があった。

この日はいつもと違った。

彼女が立ち去らない。それどころか、じゃりっと土を踏みしめてこちらへ近づいてきた。

心臓が痛いくらいドキリと脈打った。

どうして。どうして近づいてくるのだ。

慣れてしまっていたからジロジロ見すぎたか。今まで我慢していたけれどもう我慢できなくなったのか。

何を言われるのか、何をされるのか、わからない。怖い。お付きの人を呼ばれるのだろうか。あの太い筋肉まみれのうでで殴られるのか。

車へ連れ込まれ、屋敷へ連れて行かれ、何をされるのだろうか。きっととても痛く、ひどい目に遭わされる。金持ちは何を考えているかわからない。金で何でも解決する。黙らせる。殺されはしないだろうが半殺しぐらいなら平気でしそうだった。

僕はがたがたふるえた。みんなの言う根も葉もないうわさは信じていない。でも否定もできない。肯定も否定も根拠が無いからできはしない。

僕は他人と違い自分だけ心がきれいだとうぬぼれていた。でもなんのことはない。僕もみんなと同じだった。

自覚していなかっただけで金持ちを、彼女を怖がっていた。恐れていた。ひどいことをしかねない人間だと心のどこかで考えていた。汚く醜い人間だと考えていた。僕もみんなと同じように、彼女に対して醜い偏見を抱いていた。

自分の心の汚さをいまさら気づいてももう遅い。もう手遅れだ。彼女は僕の前に立つ。僕のいる芝生に立っている。うつむいて顔を上げられない僕の目に、彼女の細く美しい足が見えた。

「ねえ」

初めて聞いた彼女の声は、想像とは違っていた。こんなにきれいな声は想像しようもなかった。今まで聞いたどの女の声よりもきれいでしっとりしていた。みずみずしい清らかさにはっとして思わず顔を上げてしまった。

彼女と目が合った。もう目を逸らせない。見つめられると射すくめられたように動けなくなった。

彼女には人を惹きつけ離さない何かがあった。僕は恐怖にふるえながらも彼女に見とれてしまった。

「ねえ」

「は、はい」

「君、いつも私のこと見ているよね」



「す、すいません」

「あはは。どうして謝るの？」

彼女が軽く笑う。その笑顔はとてもまぶしく無邪気だった。恐怖が洗い流されていく。まだ怖い気持ちはあったが、ガチガチにこわばっていた全身から力が抜ける。

「となり、いい？」

「え」

彼女は僕の返事を待たずに僕のとなりに腰を下ろした。ひざを立て、片手をひざの裏に回してスカートでふとももを隠す。

「食べながら話してもいいかな？」

「あ、ど、どうぞ」

今度は何とか返事をした。でも彼女は僕の返事を聞く前に手に持ったホットドッグに口をつけていた。

「ねえ、君いつもいるよね。いつも私を見ているよね。何週間もずっと。ねえどうして。どうして私を見るの？」

「そ、それは、その」

彼女は一見上品に、でもそれにしてはぱくぱくと素早く食べている。ちょっと意外な気がした。

「これおいしいよね。私大好き。君も好きよね」

「う、うん」

「もう食べ終わっちゃった。でもこれだけじゃお腹いっぱいにならないよね。君もそうでしょ」

「うん」

「この後は屋敷に帰って昼食を食べるの。君も一緒にどう？」

「え」

彼女がずいと顔を近づけてきた。彼女の肩が僕の肩に触れる。心臓がぱくぱくした。

キスできそうなくらい顔が近い。こんな美人を間近で見ると、もうどうしていいかわからず僕はわずかも動けなかった。

すごくいい匂いがする。石けんかな。シャンプーかな。香水かな。どれもかすかに香る。でもこの甘い匂いは彼女自身の匂いだ。

女の子ってすごくいい匂いがするんだな。僕はめまいがしてきた。

彼女がぱっと身を離す。僕は大きく息をついた。

「ついてきて」

彼女は立ち上がると、すたすたと歩いていった。

「あ、あの、ちょっと」

僕はあわてて立ち上がり後を追う。

「君なんだか緊張しているみたいね。どうしてかしら。一緒に食事しながらゆっくり語り合いましょうね」

「で、でも、その、あの」

彼女は清楚な見た目と裏腹に、ずいずいと歩いていく。いつもはもっと優雅でゆっくりと歩くのに。

彼女は僕の返事を少しも待たない。食べるのも歩くのもせかせかと早い。有無を言わせない。金持ちってみんなこうなのか。

金持ちだからか。せっかちなのか。彼女は僕を待たない。質問しても返事を聞く前に答えを決めつける。自分の望む答え以外を聞く気がまったく無い。すぐに決め、すぐに行動する。

僕はあわてていた。彼女のペースに引かれてゆっくりと考えることができなかった。

彼女はお付きの人を伴い公園を出る。そこに止めてあった車のドアが開く。運転手が車で待機していた。

「ほら早く乗って」

「ぼ、僕、行くなんて言っていない」

彼女は僕の手をつかむと車の後部座席に乗り込み僕を引っ張った。その手のやわらかさを楽しむ余裕なんてこれっぽっちも無かった。

少しだけふんばって後ろを見る。怖いお付きの人がにらんでいる。僕は泣きそうになりながら車に乗り込んだ。

お付きの人が前の座席に乗り込み、ドアが閉められた。車が走り出す。僕は彼女のとなりに座って縮こまっていた。

うわさは本当だったのだ。彼女の機嫌を損ねたら屋敷に連れて行かれる。僕がぐずぐずして返事が遅かったから彼女の気に障ったのだ。

僕はどうなるのだろう。どんなひどい目に遭わされるのだろう。怖い。僕は泣くのをこらえてぎゅっと目を瞑った。

彼女は何も言わない。それどころか僕を見もしない。目を瞑ってシートにもたれ一休みしていた。

彼女のことをいつも見ていた罰だ。やめておけばいいのに毎週しつこく見続けてきた。ストーカーかと思われたのだろうか。ああ。

これぐらいのことで、どうしてこんな目に。

後悔してもしきれない。生きた心地がしなかった。車は山道をぐいぐいと上っていく。住み慣れた町から地獄へ連れて行かれているようだった。

このあとはお嬢様のお屋敷で、お嬢様が男か女かを当てる賭けをします。勝った方が相手の身体を好きにできる。主人公は勝利を確信して期待に股間を膨らませるが……

以下では、エッチシーンの一部をご覧ください。

# フェラで射精させられる

ベッドの上に僕は座り、嗚咽を漏らして泣いていた。

「ああかわいそう。泣いちゃって。かわいい。君かわいい顔しているから泣いてる顔がそそるわねえ」

彼女は僕のほほに舌を這わせ涙をなめとる。僕はたじろぐ。

「や、やめて」

「じっとしていなさい。賭けは私の勝ち。私は男。君は女に賭けて負けた。くすくす。負けたら相手に身体を自由にさせる。乱暴はしない。汚いことはしない。ただエッチなことだけ。くすくす。うふふ。あはは。やだ、まだ笑いが止まらない」

彼女はお腹を抱えて大声で笑う。さっきから大分たつのにまだ笑いが止まらないらしい。

彼女、あえて彼女と言おう。だってこうして、スカートで股間が隠れていたら、今でも女にしか見えない。胸が平らであるそこは男だけど、ほとんど女だった。

彼女は男だった。竿も玉もちゃんとついている。勃起していなかったのになんかなり大きい。僕よりあきらかに立派だった。

当然だ。彼女は僕より年上だ。あそこも僕より立派に成長しているのが当たり前だ。

今でも信じられない。目の当たりにしてもなお信じられない。今でも女に見える。女の姿、女の匂い、女のやわらかさ。なのに男なんてありえるのか。

どうしてここまで女らしいのだろうか。わからない。いや、今はそれどころではない。

僕のペニスはすっかり縮こまっていた。賭けの最中は彼女を抱く期待ではちきれそうに勃起していた。でも彼女のペニスを目の当たりにしてすっかり縮んでしまった。

それどころか、恐怖に縮こまる。賭けに負けた。身体を好きにされる。エッチなことをされる。男に。男に。

「い、いやだ。僕、童貞なのに。初めてなのに。男なんてやだあ」

僕はうつむいてボロボロと涙をこぼした。

彼女がうしろからそっと肩を抱きしめる。背中に当たる胸はやわ

らかいが、膨らんではいなかった。

「あらあら。また泣いているの。さっきから同じことばかり何度も言って。いいかげん観念しなさい」

「いやだ。いやだ。あぐ。はあ。ゆる、許してください」

「駄目よ。賭けをしたんだから。賭けの支払いを拒んだらプライドが失われるわ。だから駄目。君のプライドを守るために、きっちり履行しないとね」

「ぼ、僕、プライドなんて、いりません。だから、だから、許して。やめて」

「男の子がそんなことを言っっては駄目よ。将来女の子を守ってあげられるようになるにはプライドが無いといけないわ。ね。だから頑張る。男でしょ」

「いや、いやあ」

僕は身じろぎする。でも彼女は僕をぎゅっと抱きしめて離さない。なんて力だ。この細いうでのどこからこんな力が出るのだろう。

「逆らっても無駄よ。私のほうが力強い。筋肉はね、みっともなく膨れ上がらせるよりも、細くしなやかに鍛えたほうが強いだよ」

信じられないほど力が強い。ただの男ではここまで強いはずがない。彼女のうでは、見た目は筋肉が膨らんでいない。僕が身動きできないほどの力を出しても彼女にとってはまだまだ余裕ということか。

「筋力だけじゃないわ。筋肉、骨、関節の使い方、支え方、ねじり方。そして体術。押さえ方や投げ方。いろいろな要素を総合すれば、ただの筋力よりもはるかに強くなれるのよ。ちゃんと訓練すれば、女子供だって大人をあしらえるようになるわ」

彼女が僕を羽交い締めにしたままうなじに舌を這わせてくる。男になめられているというのに、嫌悪感よりも快感が強すぎる。

「うああ、あああ」

「気持ちいいでしょ。男の子たくさん抱いてきたからね。セックスだって訓練するほど上手になるわ。はっきりいって、私はほとんどの人よりセックスが上手い自信があるわ」

彼女が耳の裏をなめてくる。ぞくりとくる。こんなところも感じるなんて。

「私からは逃げられない。くすくす。外の使用人がなんで外にいる

かわかる？ 私は自分で身を守れるからよ。君がどんなに暴れてもたやすく押さえ込んで犯せるわ」

ぎくりとする。犯す。男に犯される。

「い、いや、やだ。許して。お尻はいやあああ」

「安心しなさい。私のお尻にも入れさせてあげるから。君の童貞も処女も、全部もらってあげるからね」

「ひiiiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

がくがくふるえる。最悪だ。男に何もかも奪われる。男なんていやだ。僕は普通に女の子が好きなんだ。男とセックスなんて絶対したくない。お尻なんて痛いに決まっている。彼女のあの立派な物が、勃起したらどれだけ大きいのか想像もつかない。

「布はねえ、のびるから単純な筋力では引き裂けないのよ。ほら映画とかだと歯で噛みきって切れ目を入れるでしょ。でもコツを知っていればね、そんなことしなくても」

彼女は僕の胸を両手でまさぐる。そしてシャツをつかんで一気に引き裂いた。

「いやああああ」

「着替えはいろいろなサイズ用意してあるからね。心配しないでいいわよ」

彼女は笑いながら歯を食いしばり、僕のシャツをびりびり破いていった。

「ひい、い、iiiiiiiiii」

「はあ。はあ。いい悲鳴。君本当最高だわ。今まで犯した男の子の中で一番そそる」

彼女は僕をベッドに押し倒し、ベルトに手をかける。

「そこは、いや」

彼女はベルトを引きちぎった。

信じられない。コツ？ そんなことで、皮のベルトを引き裂けるものなのか。

古くなって裂け目でもあったのか。わからない。ただ、ベルトを引きちぎるというありえない光景は、彼女が逆らいようのない強者だということを僕の心に植え付けた。

彼女はこうやって男を屈服させるのだ。僕は心の随まで恐怖で凍りついた。

彼女はズボンまでファスナーを壊して引き裂いた。ありえない。いや、手品みたいに何かタネがあるのか。

靴下も裂かれて僕はパンツ一枚になる。彼女はバナナの皮を剥くようにやすやすと僕の服を引き裂き取り去った。

「あらあら。女の子が抱いてあげるって言うのに。勃起していないなんていけない子ねえ」

彼女は僕の両足をぐっと押さえつける。ぎくりとする。僕の足も服みたいに引き裂くのではなからうか。

彼女が僕の股間に顔を近づける。こうして女の服を着たままなら完全に女に見える。

彼女はパンツの上から僕のペニスをなめる。やわらかいペニスに熱い舌がぬののと言う。

「う、うあ、あ」

気持ちよすぎる。彼女を怖がっているのに、男なんていやなのに、僕のペニスはむくむくと膨らんだ。

「はあ。あは。大きくなってきたあ」

彼女はにやりと笑いながら僕を見上げる。上目遣いで舌を出しながら見つめるその顔はあまりにも淫靡で美しく、どうしても男だとは思えなかった。

膨らんだペニスをパンツごとぱくりとくわえられる。僕の亀頭が彼女の口の中に含まれる。

「あ、熱い」

思わずうめく。あまりの熱にたじろぐ。マグマの中に突っ込んだかと思うほど、焼け付くような熱さがあった。

彼女はしばらく亀頭を含んでいた。口の中で舌をゆっくりと動かしながら回した。

ぞくぞくする。全身から汗が吹き出してくる。僕はふかふかのベッドの上で身をよじって悶え始めた。

「あ、はあ、あん、あ」

男なんていやなのに。パンツ越しに亀頭をなめられるだけでどうしてこんなに気持ちいいんだ。

彼女が口を離す。僕の身体を覆うようにかぶさってくる。でも身体は触れない。スカートのすそが僕の足をなでる。

「君は今日から私の物よ。毎週日曜四週間。そういう約束だったわ

よね」

僕は返事をしない。認められない。

「安心して。気持ちいいことしかしないから。でもそうやって逆らうなら」

彼女が僕の耳に口を寄せる。そして歯をたてて耳たぶにかじりついた。

「いぎっ」

「痛い目に遭わせるわよ。ちゃんと従順に身体を捧げなくちゃ。そういう賭けだったでしょ。もう忘れたの？」

彼女が笑いながらにらむ。目は笑っていない。僕はうなずくしかなかった。

「そう。いい子ねえ。キスしましょうか」

彼女が唇を寄せてくる。男とキスなんていやだ。僕はとっさに顔を背けてしまった。

「今言ったばかりなのに。悪い子。しつけがいがあるわあ。くすくす」

彼女が僕のあごの下にかじりついた。薄い皮を歯でぎりぎりど引っ張る。

「い、痛、あ、あ」

「はあ。ねえ。キスしましょう」

もう逆らえない。僕は彼女の唇を受け入れた。

その唇はたっぷり厚ぼったくて、蕩ろけるほどやわらかくて、とても気持ちよかった。男の唇を気持ちいいと感じる自分が情けなくて僕は涙を流した。

「んん。君ファーストキスじゃないの？ 何泣いているの」

「う、う、だって。だって」

「君にひとつ、いいことを教えてあげる」

彼女は僕の唇をついばむように軽くキスを繰り返す。口を離して話を続ける。

「男はねえ、女よりも気持ちいいのよ。私女に見えるでしょ。別に手術したり薬を使ったりしたんじゃないわよ。もちろん、もともとこんなに女らしかったわけでもない」

信じられない。てっきり手術したものだと思っていた。

「男とセックスして、男を気持ちよくしようとしてきたら、身体が



それに適応するの。ホルモンがどうか難しいことは言ってもわからないでしょ。単純に、男を気持ちよくしようとしたら身体は女になっていくのよ」

何の話をしているのだろう。彼女は話の合間に僕の唇を貪る。僕はさっきなめられたペニスがまるでおさまらない。彼女の唇が触れるたび、パンツの中でペニスが跳ねる。

「女の身体はねえ、男を気持ちよくするためにああいうやわらかくしなやかで美しい形をしているの。だから男だって、男を気持ちよくしようとしたら身体がそのために女らしくなっていくのよ」

ありえない。何を言っているのかよく理解できない。

「だから君も、私の男、私のペニスを気持ちよくしたらだんだん女らしくなっていくからね。ホルモンの分泌で、どうしてもなく身体が変わっていく。ホルモン注射なんていらぬ。それより健康的で劇的に、身体も心も女になっていく。声も気持ちも女になっていく。女にしてあげる。たった四週間でも十分よ」

言っていることがよくわからない。でもただ男に犯されるだけではない。身体が女になっていく？ そんな馬鹿な。

普通ならありえない。でもそれを体現した人が目の前にいる。それはどんな言葉よりも説得力を持っていた。

「僕が、女に」

「そうよ。私とは四週間だけだけど。そのあとはもう女なんか目に入らなくなるわ。私のように、男とセックスしたくてたまらなくなるわ」

「そんなの、そんなの、いやだ」

「その調子よ。いやがる男を女にする。それが最高に楽しいの。男を女にしてやる。墜としてやる。たまらないわ。これだから童貞を女にするのはやめられない。女を知らないうちに、男しか抱けない身体にしてやる」

彼女は興奮していた。美しい顔が赤く染まり汗をかいている。息が荒い。湿った吐息が甘くかぐわしい。

彼女は僕の両手を押さえつけ、キスをしてきた。さっきまでの軽いキスじゃない。唇をべったりつけて、僕の唇を割って舌を押し込んでくる。

いやだ。こわい。女にされるなんていやだ。

考えたこともない。そんな世界があることを知らない。男に抱かれていると女になっていくなんて。女にされるなんてわずかも考えたことがない。

僕が歯を閉じて彼女の舌を拒んでいると、彼女は僕の下唇をぎりぎりと噛んだ。

彼女に逆らってはいけない。従順でないといけない。逆らうと痛い目に遭わされる。どのみち受け入れるしかない。逆らうだけ損をする。

僕は歯をそっと開けた。待ちかねた蛇がにゆるりと僕の中に入ってきた。

熱くぬめる舌がうごめく。信じられないほど激しくのたうつ。舌ってこんなに素早く動けるものなのか。

彼女の舌が僕の口の中をねぶる。僕の舌を捕らえると蛇のようからみついてきた。

「んむ、ふ、んふ」

信じられないほど気持ちがいい。彼女は男なのに、嫌悪や吐き気はわからない。いや、わいているのかもしれないが、圧倒的な快感にすべて塗りつぶされていく。

長い時間口の中を蹂躪された。僕は全身がびくびくとふるえてはいれんするほど感じてのぼせていた。

彼女が糸をひきながら口を離す。その目はらんらんと情欲に燃えていた。

「暴発しちゃうともったいないからね。先に一回抜いておこうか」

彼女はそう言うと、止める間もなく僕のパンツを引き裂いた。あいかわらずどうやっているのかわからないが、パンツはまるで紙切れのようにびりびりと引き裂かれた。

僕のペニスが姿を見せる。お腹につきそうなくらい反り返りびんびんと脈打っていた。

キスされている間ずっと何度も跳ねていたペニスはまだ射精寸前だった。とろとろと大量の先走りが垂れ落ちてお腹を濡らしていた。

「はあ。は。は。童貞ペニス。まだ誰も直に触れたことのない無垢なペニス」

彼女は顔を寄せてまじまじと見る。匂いを嗅いでうっとりしている。美しい彼女がここまで淫乱だったなんて。目の当たりにしてい

るにもかかわらず信じられない。

「うあ」

彼女が僕の股に顔をうずめて玉を口に含んだ。

熱い口内は蕩ろける。玉なんて触ってもあまり感じるものではない。なのにどうして背を反らせ悶えるほどに気持ちいいのか。

「うあ、うは、ああ、はあ」

口の中で玉をしゃぶられる。ちゅうちゅう吸われる。玉を一つずつ、飴をなめるように舌の上で転がされる。袋の皮をついばんで引っ張る。

「あ、あ、あう、あく」

竿の延長、体内のペニス、海面体をこりこりと舌で何度もなぞられる。ぞくぞくする。これだけで射精しそうだ。ここを刺激するのはやばい。

「駄目、出ちゃう、出ちゃう」

彼女は上目遣いで僕をじとっと見る。もっと楽しみたいのに我慢しなさいと言う目だ。でももう無理だ。僕は首を左右に振る。

彼女はたくさん楽しむのをあきらめて、僕のペニスをぱくりとくわえた。

「うはああ」

僕のペニスは待っている間ずっとうずいていた。うずいてじれて敏感だった。熱い舌がにゆるりと裏筋をなめる。熱い口にぬぬぬと入っていく。

信じられないことに僕のペニスは根本まで彼女の口の中におさまった。別段小さいわけではない。彼女のかわいい顔に全部が入ったことがおどろきだった。

そのままフェラチオが開始される。根本からカリ首まで、彼女は頭を大きく振って何度も激しくしゃぶりたてる。

「うあ、あ、いきなり、そんな」

そうは言ってももう限界だ。ゆっくりしたところで変わらない。僕はもう射精がこみあげてきた。

「うあ！」

思わず上体を起こす。とんでもない快感がわきあがってくる。こんなの知らない。今までのオナニーとまるで快感の強さが違う。

まだ射精していないのに、今までのどの射精よりも強い快感があ

ふれていた。ペニスから全身に、放電されたかのようにびりびり広がっていた。

「うそ、うわ、何、あ、怖い」

本当に怖かった。この快感はやばい。気持ちよすぎて耐えられない予感があった。そしてもっと恐ろしいのは、彼女が男だということだ。

この射精をしたら、男を気持ちいいものだと思い知らされてしまう。

それはとても恐ろしいことだった。本能的に危険を察した。男の気持ちよさを知ってしまう。戻れなくなる。まだ女を知らないのに、男にはまってしまう。

「いや、いや、いや、いや」

苦悶する。やわらかいベッドに頭をめりこませてのけぞる。身をよじり逃げようとする。

彼女に両手首をつかまれる。すごい力で僕を押さえつける。僕は逃げられない。彼女に手をつかまれしゃぶり立てられる。僕はひざをたて頭を振るしかできなかった。

押さえつけられ、無理矢理射精させられる。男にしゃぶられ男の口に出してしまう。

「あ、はあ。許して、許して」

許してくれないのがわかっていても懇願する。涙がボロボロ出る。染められる。本当に、彼女の言うように男を知らされてしまう。

もうとっくに限界を越えているのに、僕は全身に力を入れて射精をこらえた。ここまで何かをこらえたことはない。全身から汗を滝のように吹き出しベッドを濡らした。

「いやあああああああああ」

男が射精するときに出す声ではない。オナニーは声が出るほど気持ちいいわけではない。でもこれは叫ばずにはいられない。僕は生まれて初めて、絶叫しながら射精した。

どぐっどぐっどぐっどふっ。

ペニスを根本まで口の中に包まれて、一番奥で射精した。

のどに直接流し込まれる。彼女は大量に噴き出す精液を、いともたやすく飲み込んでいく。

「あ、うわ、は、うは」

びくびくと悶えながら射精する。手首を押さえられたまま暴れられない。僕は背を反らせ、ひざを曲げてなんともみっともない格好で何度も射精した。

どぐどぐ嘔き出す。止まらない。射精するたびハンマーで頭を殴られたかと思うほどめまいがする。

目を開けていられない。目をぎゅっと瞑り、快感に耐える。でも耐えられない。こんな激しく苦しい快感があるなんて知らなかった。

強すぎる快感は辛い。天国にいながら半分地獄の釜に浸かっている。僕は涙をぼろぼろこぼしながら射精した。

ようやく、天国と地獄が終わる。これほど大量に出したことは無い。もうすっからかんだ。そう思えるほどだった。

彼女がちゅるりと口を離す。口から垂れる糸が白く濁っている。肌色に映えてとてもいやらしかった。

「はあ。おいしい。ん。やっぱり童貞の特濃初射精はたまらないおいしさねえ。オナニー以外で射精するの初めてでしょ。どう。気持ちよかった？」

気持ちよすぎた。僕は素直にうなずいた。

「そう。おめでとう。これでわかったでしょ。男はとても気持ちいいものだって。言っておくけど、女よりも気持ちいいわよ。女なんかに身体もテクも負けることはないわ。男のほうが女よりも気持ちいい。それを知らずに女なんかとセックスしている男たちはとてもかわいそう」

悲しくてまた涙が出てきた。たしかに気持ちよかった。男なのに気持ちよかった。これ以上の快感なんてありえない。女よりも気持ちいいというのほうそではないと思えた。

# 彼女のお尻で童貞を捨てる

彼女のふとももを手で押さえ上にあげる。スカートをはだけ、ペニスもお尻も丸出した。男のペニスがついているのに、女の子のスカートをめくって見ている気分だ。すごく興奮する。ペニスがギンギンで痛い。

でもまだ我慢だ。大事なところをなめてあげないと。

「大丈夫？ 無理しないでも、指でいじればそれで濡れるわ」

でもなめてあげたかった。僕の筆下ろしをしてくれる、彼女の穴をなめてほぐしたかった。

小さな肛門は薄いピンクでひくひくしている。毛が一本も生えていない。しわも少なくとてもきれいだ。

こんな小さな穴に、本当にペニスが入るのか。信じられない。このかわいい穴が今までたくさんの童貞を飲み込み筆下ろししてきたなんて。

鼻を近づけ匂いを嗅ぐ。それほど匂わない。僕は舌をのぼしてちろりとなめた。

「あん」

彼女が甘くうめく。その声を聞くとどうしようもなく気持ちよくしてあげたくなる。甘えた声は男をその気にさせる。僕は舌でべちょべちょなめた。

苦い。でも我慢だ。これをおいしいと思えるようにならなければ。

夢中でなめる。慣れてきたら、舌先で穴のくぼみをほじるようにする。

「あ、ん、大丈夫なの？ なら入れちゃってもいいわよ」

彼女の菊門がゆるむ。僕は開城された門に突入する。

舌をずぶりと埋め込むと、とても苦い味が広がる。我慢だ。僕は涙をこらえて差し込んでいく。

中で舌を動かす。壁をこすりあちこちなめ回す。どうしていいかわからない。苦みに耐えるのに精一杯で、僕は舌を無茶苦茶に動かした。

「あ、ん、はあん、いいわ、いいわよ。はあ。童貞が、私のお尻の中、なめてる、味わってる、はああ、すごい、興奮するううう」

テクではまだ気持ちよくさせられない。でも彼女は、童貞に中ま  
でなめられていることにとっても興奮して感じているようだ。

苦い汗がどろどろあふれてくる。すごい濡れ方だ。これ以上は無  
理だ。僕は舌を引き抜いた。

「あ、は、ごほっ。はっ」

「よく頑張ったわねえ。はじめのうちは辛いでしょ。でもそのうち  
おいしく思えるようになるからね」

彼女のためにも早くそうになりたい。でも今は。もう我慢できない。

僕はいきり勃起ガチガチのペニスを握りしめる。彼女の目をじっ  
と見る。

「いいわ。もう十分濡れたから。来て。あなたの童貞、もらってあ  
げる」

彼女はスカートをまくりひざを抱える。足を開き、カエルのよう  
に無様で、でもとてもいやらしい格好をする。

「は、は、はあ。はあ」

僕はいそいそと彼女の肛門に亀頭を押しつける。ペニスがぐんと  
硬くなる。もうたまらない。

「あ、あ、僕、僕」

「いいわよ。好きにして。一気に入れて。すぐに出しちゃっていい  
からね」

そこまで言われて我慢できる男なんていない。遠慮なく、ずぶっ  
と一気に突っ込んだ。

「あはあああん」

彼女が叫ぶ。

「あああ。はああ。いい。童貞ペニス。先週からずっと、欲しあっ  
たのお。君のペニス、やっと来たあああ」

すごい悦びようだ。僕もたまらず声を上げる。

「うわ、あ、これが、お尻の中、熱い、ふう。ん、くうう」

「動いて。じっとしててもすぐ出ちゃうよ。はあ。早く。滅茶苦茶  
にして。私を犯して。女にして」

「あ、ああ、僕、僕もううううううう」

力をこめてぱん、ぱんと突く。それだけでもう耐えきれなかった。  
入り口がすごく狭い。中がみっちり張り付いてきてすごく気持ち  
いい。

もう一回、突く。それが限界だった。歯をくいしばってこらえていたのに、決壊するのを止められない。

「あ、あうあぐあふあく出る、出るううううう」

切なく鳴きながら僕は射精した。

今までのどの射精よりも気持ちがいい。脳が焼き切れ破裂しそうだ。目を開けていられない。くらむほど激しい快感に、がくがくふるえてよだれが垂れる。

「あううううう、ふううううう」

うめきながら何度も射精する。どぐどぐあふれて止まらない。彼女の中に、思い切り中出しする。

「はああ。来てる。私の中に、童貞が射精しているううううう」

彼女もあえいでいる。僕は中出しの気持ちよさをもう知っている。彼女もあの、中でびゆるびゆる出され奥を撃たれる快感を味わっているんだ。

そう思うとますます気持ちよかった。きっと、お尻で出される快感を知っていると、知らないでするセックスよりも気持ちいいに違いない。

「はあ、はあ、あ、はああ」

僕はぜいぜいとあえぐ。すごい快感と解放感だ。今まで縛られていた重石から説き放たれたように、とても自由な幸せを感じていた。

「童貞卒業よかったね。おめでとう」

彼女にそう言われて、ぐっとくるものがあった。セックスしたんだ。童貞を捨てたんだ。僕はもう童貞じゃない。すぐに終わったけど、ちゃんとセックス出来たことがうれしかった。

「はあ。もう終わり？ まだよね。全然萎えていないもの」

僕のペニスは、彼女のお尻の中で硬いままだった。あんなに気持ちよく射精したのにまだ足りていなかった。

僕はずぼっと引き抜いた。彼女を後ろ向かせて四つん這いにさせる。

「そうこなくちゃ。やっぱり男はこれよねえ」

こうして後ろから見ると、彼女のペニスが見えない。大きくてきれいなお尻だ。さっきここに入れて筆下ろしを済ませたんだ。すごいな。この小さな穴に、本当に入ったんだ。

「はあ。はあ。いくよ」



僕はペニスを握り、ずぶりと差し込んだ。濡れそぼったそこはずぶずぶと、貪欲に僕のペニスを飲み込んだ。

「ううう。きつい」

「今度は締めるわよ。きつきつアヌス、たっぷり味わってね」

「は、うあ、きつい、きつい」

「すごいでしょ。これが男のお尻よ。女の膣なんて目じゃないわ。私はしたことないけど、女の膣なんてゆるすぎて話にならないらしいわよ」

たしかに、ここまで強烈な締め付けなんて他にありえないと思える。食いちぎられそうだ。きつすぎて気持ちよすぎる。

「はああ、こんなの、すぐ出ちゃう」

「何回でも出していいわよ。全部出して。私の中に、一滴残らず注ぎ込んで」

「ああ、あああああ」

猛然と腰を振る。もう滅茶苦茶だ。さっきはすぐに出ってしまった。またすぐに出すなんてもったいない。この穴の気持ちよさを、もっとたっぷり味わいたい。

「はあ、はあ、は、は」

「んんん、いいわよ。はあん。気持ちいい」

女の声、女のお尻、女の背、女の髪。どこをとっても女だった。男としているのに、女ともセックスしている気持ちになる。男と女、二人同時に犯しているようで興奮しまくった。

「はあ、はあ、すごい、セックスしている。こんなに、はあ。気持ちいいなんて。腰が止まらない。ああ。たまらないよおお」

「いいわよ。好きなように突いて。いつでも出していいからね。私のお尻で、いくらでも射精してえええ」

「あ、あ、はああ、はああ」

頑張ったけど限界だった。こんなにぎゅうぎゅう締め付けられてはまるでもたない。一分もたたないうちに、また射精した。

「あああ、ううう」

「あはああ、また出てるう、すごい量。素敵。君たくさん出るのね。素敵よおお」

彼女の背にもたれかかる。汗だくだ。荒く息を吐く。セックスって疲れる。こんなに腰を振り、こんなに気持ちよくなったら体力を

使いすぎる。

「はあはあ。ねえ。もう終わり？」

「ちょ、ちょっと、休ませて」

「だあめ。疲れたなら交代。そのまま後ろへ倒れて」

彼女に促されるまま後ろへ倒れ込む。彼女は繋がったままのしかかる。

「私もあとちょっとでイけそうだから。好きに動かせてもらおうわね。硬くしてて。いくわよ」

彼女は背を向けたまま、騎乗位で腰を振る。いきなり激しく、ガンガン振ってくる。

「う、うわ、うわわ」

すごい。なんて腰の動きだ。僕の単調な、ただがむしゃらに前後に腰を振って突きまくるのとまるで違う。

大きなお尻が踊る。跳ねる。ぐいんぐいんと大きく素早く動くのは大迫力だ。

前後に揺れたかと思うと上下に弾む。左右に振ったかと思うと大きく円を描いて翻弄する。

その間も尻の穴はきゅっきゅと締まったりゆるんだりする。移動するときにはゆるめてペニスを動かし止まるときにぎゅっと締める。締めたままずらずと引き抜かれるともうたまらない。

「ああああ。はあああ。あああふわあああ」

これがセックス。これが上手な人のセックス。すごい。こんなに違うものなのか。

気持ちよすぎる。なんだこれ。すごすぎる。普通なら一生味わえないと思うほど、上手いセックスに浸った。

「あああん、はああん、んあああ、ああああ」

もう限界だ。こんなの耐えきれない。連続でしているにも関わらずまたすぐに射精がこみあげる。ペニスがぐんと膨らむ。彼女は僕が射精しそうなことに気付く。

「あん、駄目、もう少し、あと少し我慢して」

そう言われたら、男なら踏ん張らずにはいられない。こみあげた精液をぐっと力を入れてこらえる。

「ああん、素敵、硬い。はああ。いく。中をごりごりこすられて、童貞ペニスでイっちゃううううう」

彼女がびくりとして止まる。電気ショックを与えられたかのように、何度もびくりと動いては止まる。

「あはあああ、あああああああああああ」

絶叫しながらイっている。すさまじい締め付けだ。くいちぎられる。どんな男でもこらえるなんて不可能だ。僕は絞り出されて射精した。

「うわああああああ」

強烈すぎる。もう出ないかと思っていたのにどふどふあふれ出す。どこにこんなに残っていたのかとおどろくばかりだ。

気持ちいいほど射精の量が増える。僕は大量に彼女の中に出した。

「ふ、ふう、ふあ、あふ」

「うああ、はあああ、あああう、ううううう」

二人ともびくびくふるえながら何度もイく。快感の波が何度も押し寄せて引かない。引かないうちに次の波が押し寄せる。いったのにさらに気持ちよくなっていく。脳が灰も残さず焼き尽くされる。

「ふううう、ううううう」

僕は射精しきってぐったりした。さすがに、彼女の中でペニスがやわらかくなりはじめた。

彼女は腰を上げずりと僕のペニスを引き抜いた。それを握り、口を近づける。

「あ」

「終わった後はお掃除よ。汚くなったのをなめてきれいにしてもらとうれしいでしょ。気持ちよくしてくれたお礼よ」

彼女は、さっきまでお尻に入っていたペニスをためらうことなく口にくわえた。たんねんに、味わうようにじゅばじゅばしゃぶる。

舌を出して全体をなめ上げる。玉までじっとりなめ回す。最後にまた亀頭をくわえて竿をしごく。根本から搾り出すようにして尿道に一滴すら残さない。

お掃除フェラってこんなにていねいにするんだ。僕も次から見習わなくちゃ。

ペニスをしゃぶり尽くした彼女は口をちゅぽんと離してにんまりする。

「どう。お尻を、男の女を抱いて童貞卒業した気分は」

「さ、最高だった」

「お尻に入れられるのとどっちがよかった？」

「そ、それは、ええと」

わからない。お尻に入れられる方が気持ちいいと思う。でもそもそも快感の質が違う。ペニスは男の快感で、お尻は女の快感だ。比べようもなかった。

「わからない？　じゃあ試そうか」

彼女はスカートをめくりあげ自分のペニスを見せる。そこはギンギンに反り返っていた。

「この一週間、これのことばかり考えていたでしょ。お待ちどうさま。たっぷり入れてあげるわ」

そうだ。童貞を喪失した悦びで忘れていた。僕は寝ても冷めてもこれが欲しかったんだ。

「もう疲れているでしょ。私に全部まかせて」

セックスでもうくたくただ。腰を振るのも射精するのも疲れる。彼女はまだまだ元気そうだった。

お尻がうずく。女がうずく。たった今まで男らしく女を抱いていたのに、もう女らしく男に抱かれない気持ちでいっぱいだった。

「いやらしい子ねえ。なんて物欲しそうな顔しているの。うふふ。たっぷりかわいがってあげる」

彼女が期待ですっかり蕩ろけた僕のお尻に入ってくる。ああ。これ。やっぱりすごく気持ちいい。

この日は彼女にたくさん抱かれた。彼女は僕の中にたくさん出した。僕はさまざまな体位や愛撫で何度も数え切れないほどイカされた。

すごかった。彼女がテクを存分に使い、執拗に、休むことなく責めてくる。イってもイっても許してくれない。僕の下手くそなセックスとはまるで違う。

「これでだいたいセックスのやり方わかったでしょ。次までに頭の中でしっかり復習しておきなさい。来週成果を見せてもらうわよ」

くたくたで息も絶え絶えにベッドであえぐ僕の頭をなでながら彼女はほほえむ。彼女はまだ平気そうだった。テクも性欲もまだまだ底が見えなかった。

# 原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

漫画、小説、ゲーム、動画、絵本、演劇、映画などあらゆる作品の原作として使用できます。

**アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。**

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版など無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

**原作：二角レンチ**

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

二角レンチが作成、販売している原作利用権付き作品を購入した方は、同時に二角レンチのブログ「ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版」内の全ての作品についても原作利用権を有するものとします。

ストックスタックストーリー：原作マガジン出張版

<http://stockstackstory.seesaa.net/>

# プリンタでの印刷方法

この PDF は印刷して読みやすいようにデザインされています。

1. A4 コピー用紙を uses。
2. 印刷範囲で「すべて」または「ページ指定」をします。
3. 「両面で印刷」「綴じ方：左」で「小冊子の印刷」をします。
4. 両面印刷で一枚につき4 ページが印刷されます。
5. 中綴じ用ホチキスなどで綴じます。
6. 二つ折りにすると完成です。

A5 サイズで手軽に読みやすい文字サイズになっています。

(注：お手持ちのプリンタがこれらの機能に対応している場合に限りです)

印刷

プリンター

名前(N): Canon MG5200 series Printer    プロパティ(P) ?

ステータス: 準備完了    注釈とフォーム(M):

種類: Canon MG5200 series Printer    文書と注釈

印刷範囲

すべて(A)

現在の表示範囲(V)

現在のページ(U)

ページ指定(G) 1 - 107

印刷指定: 範囲内のすべてのページ

逆順に印刷(E)

ページ処理

部数(C): 1     部単位で印刷(O)

ページの拡大/縮小: 小冊子の印刷

小冊子の印刷方法: 両面で印刷

開始ページ 1    終了ページ 27

ページを自動回転    綴じ方: 左

ファイルへ出力(F)

プレビュー: コンポジット

単位: ミリ

1/54 (1)

296.97

209.97

ページ設定(S)...    詳細設定(D)    注釈の一覧(U)

OK    キャンセル

# 奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

女装お嬢様とお屋敷で 体験版

発行日

2011年12月29日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>